

## IV 花き

### 実況

#### 1 キク

奥越の秋植え夏ギクの草丈は、3月中下旬より出芽が見られ、早いところでは3月15日頃より不織布被覆が行われた。生育が良い場所と悪い場所の差がみられ、生育のばらつきが大きい。「せいざ」、「奥越の舞」等の品種では、芽とびが多くみられる。5月14日の調査（昨年5月15日）では、「あかね」（小・赤）の草丈は66.8cm（昨年58.7cm）、葉数は45.5枚（昨年31枚）、「釣船」では草丈72.5cm、葉数47.3枚、「白霧」では草丈69.3cm、葉数42.3枚であり、昨年より若干生育が良いが、ここ4年間で最も低い草丈になっている（図1）。

病害虫の発生については、黒斑病が少発、アブラムシが微発生、白さび病少発、ミナミキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマが中発生している。降霜による害は品種間で差異が見られ、「奥越の舞」等の品種で多くみられる（表1）。

4月の高温により、開花が例年より早まる可能性があり、6月上旬からの出荷が予想される。

春植え夏秋ギクの定植は、4月15日～20日頃に行われた（テラルの匠では4月24日）。摘芯後の脇芽長は2cm程度に伸長している。病害虫はアザミウマ、アブラムシが微発生している。

キク部会の作見は4月20日と5月23日に行われる予定である。

福井市東郷の春植え夏秋ギクは、定植が5月1日前後、摘芯は5月10日頃に行われた。エスレルは5月15日以降に1回散布する予定である。ハモグリバエの産卵痕が確認された。

大土呂の春植え夏秋ギクの定植は4月20日前後、摘芯は4月26日に行われた。5月初めにエスレルを1回散布した。摘芯後の脇芽長は、5月15日の調査（昨年5月16日）で「小紫」で2cm（昨年11cm）、「小鈴」で2cm（昨年16cm）であった。5月初めにエスレルを1回散布した。アブラムシ類が中発生している。

あわら市の春植え夏秋ギクは、4月15日前後から定植された。

越前市の春植え夏秋ギクは、4月下旬から5月10日にかけて行われた。摘芯が適時行われている（5月15日調査）。

丹生の春植え夏秋ギクは、定植が4月13日から4月末までかかり、摘芯は5月14日で終了している。摘芯後の脇芽長は、5月15日調査（昨年5月17日）で、「小鈴」で8cm（昨年9.5cm）、「花絵」で1cm（昨年6cm）、「恋心」で6cm（昨年16cm）であった。

9月咲きギクは5月5日前後（昨年5月8日）から定植を開始した。

二州の暮植え夏秋ギクは4月上中旬に摘芯が行われた。5月15日（昨年5月15日）の調査

表1. 凍霜害(シカミ)発生における品種間差異

発生率	品種名
高	織姫、精かのか、精ひなの、シューペガサスあかね、あい姫、秀まこと、奥越の舞、玉姫
低	釣船、白船、めぐむ、秀うきぐも、秀ちはや、小紫、小鈴

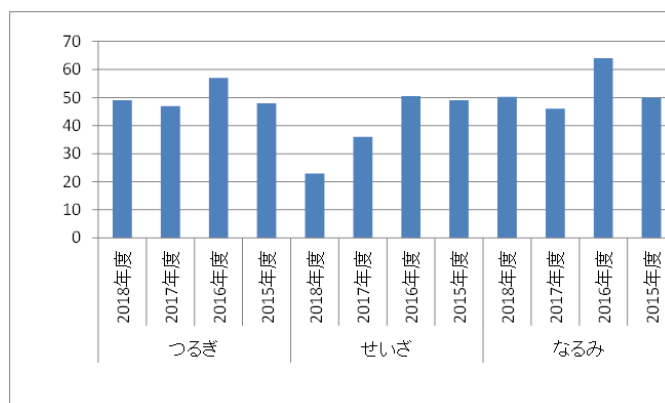


図1 6月咲品種の年次別草丈(5月中旬調査)

での草丈は、「小鈴」で 24.8cm (昨年 20.4cm)、「花絵」で 24.6cm (昨年 31.6cm)、「さざなみ」で 26.4cm (昨年 28.0cm) であった。アブラムシ類とハモグリバエ類が微発生している。4 月中下旬植えの夏秋ギクは、5 月 15 日調査 (昨年 5 月 15 日) での脇芽長は、「小鈴」が 2.5cm (昨年 3.6 cm)、「花絵」が 2.4cm (昨年 8.4cm)、「水鳥」が 1.6cm (昨年 3.3cm)、「翁丸」が 2cm (昨年 5.3cm) であった。ハモグリバエ類、白さび病の発生が認められた。

若狭の露地の暮植え夏小ギクの草丈は、5 月 16 日調査 (昨年は 5 月 16 日)、「はなふさ」51.6cm (昨年 62.6cm)、「はじめ」74cm (昨年 72.6 cm) で、草丈のばらつき大きい。芽立ち数は「はなふさ」が 25~27 本/m (昨年 30 本/m 前後)、「はじめ」10~16 本/m (昨年 14~21 本/m)、「とび丸」10~13 本/m、「夏の風」は芽立ちが悪かった。下葉にハモグリバエ類の幼虫食害が発生している。春植え夏秋ギクの定植は 4 月 11 日 (昨年 4 月 17 日) から行われ、4 月 29、30 日にピンチが行われた。5 月 16 日の調査 (昨年 5 月 16 日) の草丈は、「くれない」で 3.2cm (昨年 6.2cm)、「翁丸」で 4.6cm (昨年 9.8cm)、「しらかば」で 3.2cm (昨年 9.6cm) と生育が遅い。

小浜市の 9 月咲き作型は 4 月 29~30 日に挿し芽が行われ、5 月 18 日から定植された。

農業試験場の春植え夏ギクおよび夏秋ギクの定植は 3 月 28 日に挿し芽、4 月 11 日に定植し、4 月 25 日に摘芯した。5 月 14 日調査の草丈と脇芽長は表 2 のとおりである。

表2. 農業試験場 露地圃場における生育状況(5月14日現在)

品種名	脇芽長(cm)	品種名	脇芽長(cm)
はくよう	9.1	東海福祉	6.6
さやか	6.9	あすか	6.4
さぼてん	7.8	はなふさ	3.6
花絵	7.5	牛若	4.6
星の砂	10.9	こずえ	9.3
シャロット	9.6	ふくろう	11.7
白樺	6.8	七夕かざり	9.7
舞人	5.3	ひまわり	7.7
翁丸	7.5	シューペガサス	6.4
さきがけ	5.3	奥越の舞	5.5
はるか	6.4	清風	5.8
織姫	7.8	サマーゴールド	6.3
とび丸	10.2	夏紅車	7.5
小鈴	7.4	砂浜	6.8
うたげ	6.6	星の輝	9.8
玉姫	9.1	スーパーイエロー	8.0
くれない	6.5	新流星	10.5
かばちゃん	5.4	宝の山	7.3
小紫	3.6	サマー3号	9.5
やよい	6.8		

挿し芽:3月26日、定植:4月11日、摘芯:4月25日

## 2 ユリ

奥越のシンテッポウユリ「オーガスタ」の生育は、4 月下旬から苗が頒布され、4 月下旬に定植された。実生苗の葉数は 4~6 枚である。中心球の一部に葉枯病が発生している。

春江の 4 月 6 日定植の「アルデフェーラ」の草丈は 32cm、3 月下旬定植の「リッチモンド」は 34.5cm であった (5 月 17 日調査)。

あわらの8～9月出荷の作型において、シンテッポウユリ「雷山2号」「雷山2号セレクト」、  
「オーガスタ」の実生苗では、4月下旬からハウス内に定植された。「オーガスタ」の葉数は5  
月15日調査では3～4枚程度で、8月下旬～9月上旬に開花予定である。中心球利用型栽培では、  
草丈10～20cm程度で、「オーガスタ」は生育の揃いは良いが、「雷山2号セレクト」は不揃いである。  
中心球利用の「雷山2号セレクト」に、葉枯病が少発生している。LAユリは蕾が2～8  
輪で、6月上旬開花見込みである。

### 3 スイセン

葉の枯れ上がりは、4月下旬より始まった。

### 4 トルコギキョウ

あわら市では二度切り栽培のレイナ系、ネイル系他の品種で、2番花が草丈20～30cm（昨年  
30～40cm）、芽の選りは終わって、1株当たり2～3本/株に整理した。早い品種では、天花が発  
蕾中である。一部品種にアザミウマ類が中～多発生している。中生品種の「はるか」は立枯率  
が高く、草丈が20～30cmで開花した。アザミウマが多発。4月定植旧盆出荷型のバルカン系品  
種では、4月28日前後に購入苗が定植され、5月15日調査では本葉が3～4対である。

越前市では5月15日調査(昨年5月17日)で昨年夏に定植された二度切り栽培用の「ボヤ  
ージュグリーン」、「レイナホワイト」で草丈が33～37cm、盆用の4月下旬定植作型で草丈3cm(昨  
年5～6cm)、4対葉(昨年5対葉)で抽台している。6月咲作型(昨年11月下旬定植)の「ロジ  
ーナグリーン」が草丈47cm(昨年64cm)、14対葉(昨年16対葉)で、葉先枯れ病が中発生し  
ている。「プティフル」では草丈28cmで13対葉、「ボヤージュグリーン」では草丈48cm(昨年  
64cm)で15対葉(昨年16対葉)、発蕾中である。

美浜町の盆出し作型は3月下旬播種苗は、5月下旬に定植予定である。

若狭では5月16日調査(昨年5月16日)で、3月上中旬より播種した苗を5月下旬に定植す  
る予定である。

### 5 その他

奥越のシャクヤクは目揃え会が5月9日(昨年5月10日)  
に行われ、開花は昨年より遅く、例年より早い。4月26日調査  
では、「サラベルナール」で草丈54～64cmで出荷時の秀品が多  
い



写真2 出荷適期のシャクヤク

奥越のアリウムギガンチュームは開花が例年より早く 5  
月21日頃から出荷予定である。5月14日調査(昨年5月  
16日調査)で葉数8～12枚、株径30～50cmで昨年よりや  
や小さい。2か所で1,000本程度の出荷が見込まれるが、小  
ぶりで草丈がやや短い可能性がある。



写真3 アリウム圃場

あわらのアスターは電照促成栽培のものが3月下旬にハ  
ウス内に定植され、5月15日の調査では草丈が40～50cm  
であった。開花は6月中旬予定。アスター黄色輪紋病が発  
生、アブラムシも微発生している。

## 対策

### 1 圃場の排水徹底

梅雨期、雨が多く降ると畝溝へ滞水し根腐れをおこし、下葉の枯れ上がりや生長の低下などにより出荷量が低下するので、次の対策を行う。

- 1) 畝溝の排水、水の通りを良くするため、溝さらえや除草を行う。
- 2) 畝溝と直角に交わる集水溝を畝の両側（できれば圃場周囲）に必ず設け、排水溝に落とす。すでに設置してある場合は清掃や除草を行う。
- 3) 排水溝が高く排水しにくい場合は、雨の時に強制排水を行うため、排水溝の端に集水桝を設置し、ここからポンプで強制排水を行う。
- 4) 7月咲の暮れ植えギクの場合、滞水が続くと根の活性が低下するので、通路や肩の土を削り、地際に土寄せする。この作業により新根発生が促されるため、生育が向上する。
- 5) 過湿気味の圃場で栽培された花卉は日持ちが悪くなりがちであり、キクではいちょう病の発生につながるため、極力、上記の対策を励行する。



写真4 排水不良圃場。入梅前に対策を行う

### 2 秋植え夏秋ギクの管理

- 1) 花芽分化後の乾燥は、花卉の伸びが悪く小輪となるため、中輪品種では乾燥させないように注意する。
- 2) 花芽分化後（開花の40日前）に、止め肥として10a当たり窒素成分で5kg程度を、畝の肩部分に施用し、肥料の分解と上根の発根促進のため、土寄せを必ず行う。特に高温期はガス害の懸念もあるため、速やかに土寄せする。
- 3) 止め肥施用後、降雨が多い年は生育後半に肥料が切れる。葉色が落ちた場合はOKF-1、ハイポネックス等の500～1000倍で葉面散布をするが、白さび病や褐斑病がみられる場合は施さない。
- 4) 中輪品種では発蕾始めに花首の伸長を抑制するために施設栽培（雨よけ栽培）でビーサイン水溶剤80を10a当たり500～5000倍液50～150ℓを茎葉散布する。伸びやすい品種は1000倍程度で茎葉散布を行い、確実に効かせる。

### 3 梅雨期の病害虫防除

#### 1) キク白さび病

気温が25℃以下の湿潤な時期に発生する。草丈50～60cmまではジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブルなどで1週間に1回の予防散布をする。散布時期は雨前が基本であるが、発病が多い場合は、雨の止み間に、チルト乳剤25、アンビルフロアブル、マネーヅ乳剤や、ストロビルリン系（ストロビーフロアブル、これらは品種によって薬害の恐れがあるので他剤の混用を行わず、展着剤も加用しない）の治療剤を散布するが、同一系統の連用による耐性菌の出現に注意する。ハチハチ乳剤も白さび病に登録がある。

#### 2) キクのアザミウマ類

苗を新たに導入した場合は特に注意して防除する。キクを加害するアザミウマ類はミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、クロゲハナアザ

ミウマ、ネギアザミウマなどの各種があるので、種を確認した上で効果や抵抗性を考慮して薬剤を選定する。特に圃場での切り残し花が発生源となるので早期に除去する。

ミカンキイロアザミウマはキクのえそ病(TSWV)を媒介するので特に発生に注意する。

### 3) キクのマメハモグリバエ

5月中下旬から優占種がナモグリバエからマメハモグリバエに変わる場合が多い。葉に対する食い込みが多くなると枯れ上がりがひどくなるため、初期防除を徹底する。マメハモグリバエは幼虫が黄色で、幼虫はさなぎになる前に葉から落下し地中やマルチ上でさなぎとなる。5～7月に発生が多い。発生予察は黄色粘着シートで可能である。

### 4) ユリ葉枯病(ボトリチス菌)

花芽分化期以降、葉枯病に感染しやすく、圃場排水が悪い条件では特に発生が多くなるので防除を徹底する。雨よけ栽培を行うと発生は少なくなる。露地栽培では出荷の30～40日前、施設で50日前までは、セイビアフロアブルやダコニール1000などの保護殺菌剤を、1週間に1回散布する。発病を認めたら、発病初期にアフェットフロアブル、ポリオキシシAL水溶剤等の治療剤を散布する。展着剤では、保護殺菌剤には展着剤なしで散布するが、施設栽培では汚れ軽減のため界面活性剤系の展着剤を用いる。

## 4 促成スイセンの花芽分化促進処理

- 1) 高温処理開始までに球根の表皮が親指の腹で簡単にむけるくらいに十分球根を乾燥させる。
- 2) 高温処理は2週間行う。
- 3) くん煙処理は高温処理後にモミガラを1日3時間の割合で3日間燃やして行う。
- 4) 処理後は植え付けの7月下旬まで、風通しのよい納屋や車庫などで保管する。
- 5) 腐敗した球根は取り除き、7月末日ぐらいをめどに定植する。

## 5 トルコギキョウの葉先枯れ症

- 1) トルコギキョウの葉先枯れ症は、極端な水分ストレスにより、カルシウム欠乏となり、生育中期に上位葉の葉先が褐変や萎縮し、ひどい場合には心止まりになる。組織中にカルシウムが少ない品種は出やすく、障害を受けやすい傾向にある。
- 2) 昼温が高いほど発生しやすくなるので、ハウス内の換気に努める。ハウス内の空気が動いている場合は発生が少ないとされるため、内気扇も有効である。
- 3) 発生しやすい品種については、花芽分化の時期を中心にカルプラス等を数回、葉面散布する(定植約1カ月後から出蕾期までの間、週1回散布するとよい)。ただし、灰色かび病、炭そ病が発生した圃場では施さない。

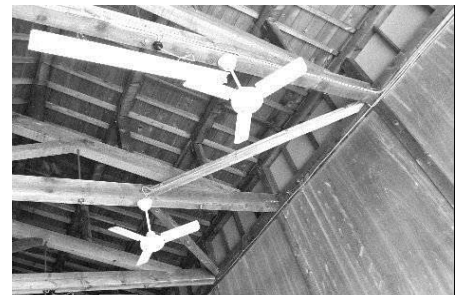


写真5 カルシウム欠乏による葉先枯れ症

## 6 梅雨期の切り花出荷

梅雨時期に出荷する場合、出荷箱内での花や葉から、ムレにより灰色かび病等による荷いたみが生じやすいので次のことに注意する。

- 1) 収穫前にハウスの換気を十分に行う。
- 2) 露地栽培の切り花を、降雨時に収穫した場合は茎の下を持って振り、花卉の間や葉にたまった水を極力取り除く。



- 3) 収穫後に切り花の基部を水中で切り戻し、水揚げを円滑にする。「水切り」等によってできる、切り下の茎や葉はいけ水に溜まらないようにする。いけ水は頻繁に交換する。
- 4) 収穫後、箱詰めまでに花全体が乾くように風通しをよくする。咲きすぎた花は調整時に除く。エアコンの除湿運転や扇風機などで花をできるだけ乾かす。
- 5) 出荷箱に詰めてからも、出荷間際まで箱をあけておき、花全体をできるだけ乾かす。

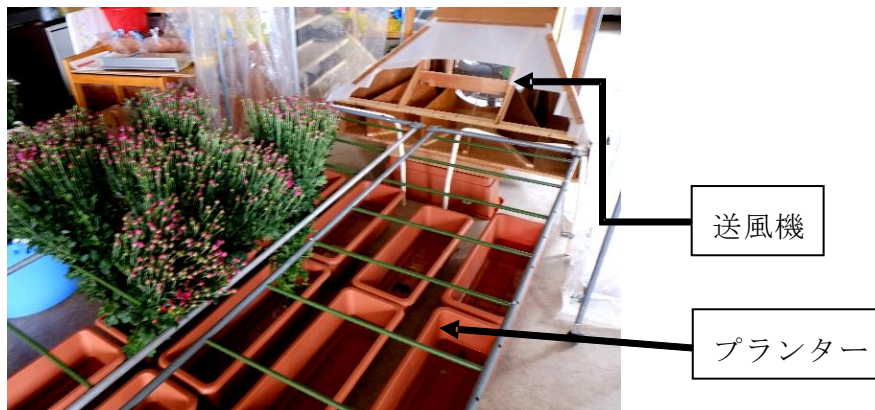


写真 8 次作の水揚げ機材の例  
プランターと送風機を組合せたもの

参考：アメダスの気象データ

